

日本語教育とスクールソーシャルワークの連携
～高校生年代での支援現場の報告とSST(ソーシャルスキルトレーニング)を含んだ
日本語の学びに向けての提案～

前嶋深雪（神奈川県教育委員会 県立高校 スクールソーシャルワーカー）

実践の場の特徴

県立高校SSW（スクールソーシャルワーカー）は拠点校配置、担当地域を持ち職務を行う。このたびの発表にかかわる学校種として、全日制高校・定時制高校、及び神奈川県には「在県外国人等特別募集」があり、この募集枠で入学した外国につながる生徒を対象とする。

実践の目標

県立高校SSW事業は平成27年度から開始された。初年度の平成27年度では外国につながる生徒の相談には緊急のケースが多いという特徴があった。そこで、平成28年度の実践目標を、外国につながる生徒について、日本語教育担当の先生・担任と連携した情報共有により支援の展開を検証することに定めた。

具体的な実践の内容とその過程

担任・日本語教育を担当する先生及びSSWで情報共有を行う視点として、日本語の習得のレベルについては日本語教育の先生と、日々の授業の中でキャッチできた生活や進路等の不安や困難を抱えている・抱えそうだというニーズ把握は日本語教育・担任の先生と、情報共有を行う、また生活等の不安要素のほかに、発達の偏り等の特性へのニーズ把握として、SSWが授業見学を通して行動観察を行う等、情報をキャッチする視点と情報共有の方法等をPDCAサイクルで積み上げた。

結果と考察

高校生年代では日本語の学びに加えた支援の視点が求められることが明らかになった。頼りになる年代であるゆえに家族の面倒を見る、アルバイト等家計を助けるためのケアラーとして期待されること、日本社会におけるソーシャルスキルの要求が義務教育年代より強く、共同体から排除される傾向が強くなることが挙げられる。SST（ソーシャルスキルトレーニング）を含めた日本語教育が必要であり、日本語教育とソーシャルワークが連携した高校年代特有の教育内容が必要となる。